

古民家という宇宙

すぎむら かずひこ
杉村和彦
福井県立大学学術教養センター長

北陸の中山間地、とりわけ、限界集落といわれるような地域の周辺には古民家が点在する。雪深い北陸の風土のなかで育まれた、がつしりとした作りの古民家のなかに置かれた表具、障子、囲炉裏のどれにも、日本文化の粋が集められている。埋もれた宝、いまだ語られざる小さな「博物館」たちが、今や捨てられようとしている。こうした古民家を現代にどう生かそうか考えながら歩いてみた。



今立のロングステイプロジェクト

「今立いまだて古民家・匠・ロングステイプロジェクト」が、二〇〇四年に福井県の地域ブランドを創造するための事業のひとつとして発足した。これは、古民家にロングステイしながら、今立（現越前市）の歴史、工芸、芸術、農業、林業などの地域資源が学習できる、ひとつのエコ・グリーンツーリズムの活動であった。プロジェクトが終了した後も、その母体となったNPO森のエネルギーフォーラムの「遊作塾」という活動として続けられている。この事業には、日本有数の腕をもつ宮大工や越前和紙の人間国宝までが参加している。伝統に裏打ちされ、引き継がれてきた匠の技を生かしながら今立の住民が生き生きと活動できる場を創造することを目指しているためだ。

地域のコスモス

今も続く過疎化のなかで捨てられようとしている古民家。古民家には、これまで生きてきた人たちの思いが立ち込める。柱の傷のひとつひとつに、床板の割れ目に思い出がこもる。地域の素材を取り込んだ古民家では、住居としての空間の使い方にも、村社会の姿が刻まれている。住ま

う人によって、常にその生活に適合するように作り変えられてきたからである。古民家それぞれが、地域の資源に支えられ、地域の多彩な技、地域の生活が凝集されたひとつのコスモス（宇宙）だ。

プロジェクトの活動は、われわれの日常に「手作り」世界を取り戻す試みでもあった。というのは、活動の舞台である「古民家」そのものが手作りによって支え続けられているからだ。古民家のモノたちには、匠の技のエッセンスがちりばめられ、モノ作りを支えた小さな道具は、さらにそれを作るモノ作りの技に支えられている。古民家が崩れていくとき、モノ作りのコスモスが根こそぎ失われていく。

「遊作」というコンセプト

プロジェクトの推進を通じて生まれてきたコンセプトに、「遊作」がある。手作りを軸としたモノ作りは今日、田舎志向の人にとって重要なことだ。しかしあまり生真面目なモノ作りでは都会から来る若い人たちにアピールすることができないだろう。都市の人たちが田舎に楽しさやくつろぎを求めて来るのなら、そうしたことに応えられるコンセプトが必要である。そのためには、匠たちにも、自分たちの世界のなかだけに立てこもるのではなく、そこから踏み出して胸襟を取り払って若者とも交わり、現代にふさわしい何かを作り出していく自由な「場」が必要だ。そこが「遊作」である。活動を繰り返すなかで、「匠と遊び、匠も遊ぶ」というような「遊作塾」の原風景が、実行委員のメンバーのなかで共有されるようになって来た。遊作塾を支える視点は、「古民家を守る」というより、それにあらたにいのちを吹き込み、あえていえば現代社会のなかで古民家を再創造していくという視点であり、古民家から現代を見つめ直すことであった。

二世紀の「田舎」の創造

地域には数知れない本物の匠たちがいる。その方々は優れた技の伝達者であると同時に一人の地域社会の住民として、地域の再生を願い、未来を見据えている。古民家を現代に生かす試みは、こうした匠たちとのコラボレーションをとおして二世紀の「田舎」を創造することだ。今日、地方を繰り返し訪ねてくる都会人が多くなってきた。都会の博物館の展示のなかに、いわば田舎の「伝統」を訪ねる人も多くなるように思う。いまだ語られざる田舎の小さな「博物館」と、田舎を求めて都会の博物館に集う人をつなぎ、新しい地域文化を創出していく道はないのか。古民家を訪ね歩きながら、ふと考えた。



参加者と宮大工の棟梁直井氏（右）の木取り作業

釘隠しが床柱に打ちつけられている



NPOの拠点施設である古民家



囲炉裏に火を入れ完成を共に祝った



1階天井部分が2階の厨子（ツシ）部分にあたる